
Sランクの日々

利野海子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Sランクの日々

【Nコード】

N3723K

【作者名】

利野海子

【あらすじ】

人間にランクを付けることが世界的に義務付けられて半年、今迄の規格から大幅に外れた例、「Sランク」が報告された。

「Sランク」は国によっては処分されたり、そうでなくとも「人外」として敬遠された。

日本政府は彼ら、彼女らを救う為に学園を設立した。

その名も「墨欄学園」通称「Sラン学園」

そしてそんなシリアスな事お構い無し、とばかりに普通に過ごす学生達をかいてる筈です

Sランク高校概要（序章）

人をCからAまでランク付けする制度が世界的に導入されてから半年、今迄の規格から大幅に外れた例がいくつか報告された。

更に半年後、研究が進み、検討も進んで、規格から大幅に外れた者の事を「Sランク」と呼ぶ事にした。

彼ら、彼女らは、規格から外れているが故に、一般人から理解されず、蔑まれ、敬遠され、恐れられ、畏れられていた

果てには「人外」と揶揄される事もあった。

国によつては処分する事もあった

産まれてきたときから、才能、才覚があつただけなのに

望んではないのに

何もしていないのに

否何もしないが故に

疎まれてきた

日本政府はそんな彼ら、彼女らを早急に保護すべく山奥に学園を作った

この学園では、彼ら、彼女らは、皆が皆Sランクであるゆえに、CとAランクの人間、所謂「普通の人間」と同じ様に暮らす事ができる。

「普通の人間」達に、差別、偏見、憎悪、嫉妬などされる事無く「普通の人間」達と同じ様に喜怒哀楽に満ち、満足の行く素晴らしい学校生活を送る事ができる。

この学園の目的だった。

並外れた才能も、並外れた才能同士で集まればそれが普通になるこの学園の理念だった。

「凄い人」、所謂Aランクの人間からも外れた人間、

「普通の人間」の近くにいればその人の人生を狂わせかねないSランクの人間達

彼ら、彼女らを救う為に作られたのが、この学園だった。
この学園の名を、墨爛学園といった。

設定を活かせなくなっていていいじゃない(前書き)

ええ、タイトルの通りです

設定を活かせなくなっただっていいじゃない

「ねえ、佐藤君」

「なんだい鈴木君」

「この小説（笑）の執筆者（笑）はキャラの説明を「面倒臭い」と言う理由でしないそうだよ」

「ふーん、だから僕達の説明もないんだね」

「ううん、それは違うよ」

「えっ？じゃあ」

「僕達の説明がないのは」

「ごくり」

「もう出てこないからだよ」

「わああ」

「さあ記念すべき第一話は今流行りの生徒会のお話だよ、書記のみやーちゃん」

「会長の果村さん、非常に申し上げにくい事ですが、そのブームは結構前に過ぎてます、あと私の姓は見聞です」

「まあまあ、この生徒会という硬く見られがちな組織においても、親しみというものは大事だよ、みやーちゃん改め都ちゃん」

「見聞です」

「ああごめんごめん灯ちゃん」

「まったく逆のイメージになりましたね」

「ついでに僕のキャラクターも固まってきたね」

「第一話だのキャラクターだの、私には会長のおっしゃる事が理解できません」

「まあいいじゃない、あとさ、どーーーーーでもいいんだけど」

さあ、今日結構大事な会議の筈なのにニヤリちゃんと僕しかいないね」

「会長、お言葉ですが、それは比較的重要な案件に含まれる事柄だと私は思います」

「ふーん、じゃあ重要なんだろうね」

「ずいぶん簡単に意見を変えますね」

「だって、宮見ちゃんがそう言うんだから、そうなんでしょうよ、て言うか名前間違えるの面倒臭くなったからみゃーちゃんって呼んでいい？」

「随分私の事を買い被っておられますね。あれ？今名前間違えませんでしたよね？」

「名前はちゃんと間違えたよ、うん、多重会話面倒臭いな、やめよう。という訳で、ストーリーに関係のある会話だけにしよう。はい、みゃーちゃん仕切りなおし」

「随分私の事を買い被っておられますね。」

「うん、だって僕みゃーちゃんの事好きだし」

「………会長」

「なんだい？もしかして僕のさり気ない言葉で、自分の気持ちに気付いちゃった？」

「ありませんね、気持ち悪い」

「みゃーちゃんは言葉遣いが丁寧なだけで気遣いはないんだね、つまり言葉イコール気、という考えは間違いだ」

「上手い事言っちゃった、みたいな感じの気持ち悪いドヤ顔でこっちを見ないでください、気持ち悪い」

「二回言う程僕は気持ち悪いのかい？大好きなみゃーちゃんに気持ち悪がられて会長は寂しいよ、でも気持ちいい」

「それはSランクなのにM、というギャグでしょうか」

「うんそれもあるけど、でも事実でもある」

「気持ち悪いの二乗です」

「ああ、それは、僕自身が気持ち悪い上に、言動が気持ち悪いって

事だね」

「ああ、そういえば会長自身も気持ち悪いですね、やっぱり三乗でした」

「そろそろ僕泣くよ？僕MだけどDMじゃないんだからさ」

「会長の泣き顔、見たいです」

「みゃーちゃんのSな部分に火をつけちゃった」

「会長に放火、楽しそうです」

「うん、人に放火は犯罪だからやめよう」

「言うべきはそこでは無いと思われませう」

「ボケと突っ込みの立場がチヨコチヨコ変わって読みにくいだろうから落ち着こうか、ん？落ち着く、落ち着け、・・・オチをつけよう」

「わかりました、面倒臭くなってきたんですね」

「うん」

「では僭越ながら・・・私も会長の事が好きですよ」

「わお、びっくり」

落ち着けなかった

設定を活かせなくなっ
ていいじゃない(後書き)

気付いたらセリフだけでした

前回の反省を踏まえ(前書き)

反省なんてしてねえけどな!

前回の反省を踏まえ

「やあ、佐藤くん」

「やあ、鈴木くん・・・てアレ？」

「どうしたんだい、佐藤くん」

「ねえ、鈴木くん、僕たちの出番ってもうないんじゃないの？」

「それはね、佐藤くん、その予定だったのにこのクソみたいな小説をプリントアウトして、クラスメイトに公開するというなんとも痛い計画を実行して本編よりこのコーナーの方が反響があつたからなんだ」

「それは凄いな、鈴木くん、で、肝心の本編の反響は・・・」

「ところでくん、佐藤くん、この世には聞いてはいけない事や、触れてはいけない過去があるんだよ」

「ごめん、鈴木くん」

「分かればいいよ、佐藤くん」

「ここは、Sラン学園統合合唱部である、ねえ」

グランドピアノに背を預けながら腹の色が読めない少年が呟いた
「わあ！いきなりどうした！部長！代理！」

いきなりの部長のセリフに驚いて変な髪形の少年が飛び跳ね始めた
「いや、今日の部活はこのセリフから始めるとの神のお告げがあつたんだよ」

「そうか！なら仕方ないな！」

本気で納得したかの様に、いや、本気で納得してその変な髪形の少年は所定の位置に腰を落とす。

「納得するな君名、適当な事言わないでください部長」

白髪長髪の美少女が立ち上がりながらつつこみを入れる

「真面目だねい、副部長代理弓射さん」

「真面目な奴は損するぜ！」

「大方、説明口調がマイブームなだけでしょう、今日から大学部が活動無期限停止になったからって好き勝手しないでください、部長代理がそんなんじゃない部が乱れます」

「いいじゃん、まだ僕らしか来てないんだから」

「心持の問題です、第一合唱というのは、技術で「歌う」のではなく、皆の心で「訴う」ものなのでですから・・・」

「あー、あー、分かった分かった、でも人の事言えないんじゃない？弓射ちゃん、そんなんじゃない歌しか歌えないよ？」

「私はちゃんとプライベートの時と合唱の時の心持は区切ってますから！」

「その真面目モードをプライベートと言うんだ・・・」

「例外は！良くないぞ！弓射！」

「君名は黙ってる、今は部長代理と私が話している」

弓射と言われた少女の眼光が獣のそれに変わる

それと同時に君名なる人物の眼光も変化し、それが合図とばかりに二人は取っ組み合いを始める

「うがるるるる！」

「キシヤー！」

「・・・猫と犬の喧嘩かよ・・・ハイハイ喧嘩は辞め」

「部長代理は！」

「黙ってる！」

手を組んだまま顔のみをこちらに向け猛る

「ええ・・・どうしろと・・・」

部長代理が困惑していると、音楽室の重い扉が音を立てて開く

「ちーす」

「お願いします・・・」

「・・・ふん」

セリフを発した順から速見、果村、茶雫である

この三人は中等部に在籍する仲良しトリオで、大抵何処に行くのも、何時であるうと、一緒にいる。(5W1Hトリオとも呼ばれて

いる)

「おー、いい所に来てくれた中三トリオ君、ところで果村ちゃん、あのバカ生徒会長は元気かい？たまには体調崩してもらいたいんだけど」

部長代理は二人の喧嘩を止めるのをやめ、喧嘩する二人から注目を外そうと適当な会話で誤魔化してみた

「お兄ちゃんは・・・寮違うし、分かんない・・・です・・・って
いうか、部長代理は・・・同じ学年だから・・・部長代理の方が詳しいはず・・・」

「ああうんまあそりゃそうだ」

会話の誤魔化し、失敗

「あり？君兄いと弓姐えはまた喧嘩？」

会話の誤魔化し、大失敗

横を向くと未だに二人は睨みあいながら取っ組みあいを続けている
「そろそろ付き合っちゃえばいいのにねえ、弓射ちゃんと君名くん」
部長代理が呆れたように言うと、今度は逆にトリオが呆れた顔をした

「・・・」

「・・・」

「・・・」

三人が三人とも三点リーダだった

その内二人は標準装備だけど

「まあそれでいいならいいけど」

代表して三毛猫に近い印象の少女、速見が溜息をつく

「早く止めなきゃかねえ、そろそろ初等部とか中二の絶望姉妹とか中一の本気ちゃんとか来るし」

高等部2、3年生が飛ばされているのではなく、それぞれ、入部希望者がいなかっただけである。悲しい話だ

「あの・・・もう誰も来ないです・・・」

捨て犬のような瞳で下から見つめながら果村が呟く

「あれ？今日ってなんかイベントあったっけ？」

「違います、部長代理今日はインフルエンザが」

「大流行！感染者が3人を超えた！学年は！寮で待機！」

「って先生方から連絡があったでしょう」

いつの間にか喧嘩を止めていた二人が息ピッタリに、部長代理に
提言する

「ん〜、あれそうだったけ、んじやいっちょ始めよか。そうい〜ん、
しゅ〜ご〜」

全員がピアノと部長代理の前に整列する

「総員点呼！始め！」

全員が自分の番号を発し終わり

「総員！気を付け！礼！」

「あーしまーす！」

この時だけは、どんなキャラだろうがどんな事情があるうが声を
全力で揃える

これがこの部の魅力である

・・・といたいが、大学部が全員若干アレなアレなので、中々
そうはいかない

「ん〜と、今日って顧問来る日だっけ？」

「第二顧問村崎先生が五時から来ます」

「げ、苦手なんだよ、あの人・・・」

「真面目に、心をこめてやっていれば苦手や得意などあるうはずが
ありません」

そんな感じで今日の統合合唱部の活動が始まった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3723k/>

Sランクの日々

2011年10月9日20時37分発行